妖怪屋【狐亭】

ネイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖怪屋【狐亭】

【Ｎコード】
Ｎ１８８９Ｊ

【作者名】
ネイブ

【あらすじ】
タイトル、もしかしたら変わるかもしれませんという見事なまでの見切り発車でスタートしました。

あまりにも自身の執筆状況がひどいので下げさせていただきます。お気に入り登録してくださった方、読んでくださった方、誠に申し訳ございません。

零話目（前書き）

性懲りもなく連載物に手をつけてみました。
誤字脱字などがありましたらお願いいたします。

毎度のことながら見切り発車ですが・・・がんばりますっ。

零話目

うーんと小さい時、私は悪魔に会った事がある。

真っ赤な夕日に照らされた、真っ赤なバスの中で、彼女は云った。

ゲームをするかい、小娘。

酷く妖艶に。彼女はそう云った。バスと同じ様に真っ赤な唇が弧を描く。髪と同色の黒く長い睫毛に彩られた、同じくバスと同じ様に真っ赤な猫目で彼女は幼い私に問うた。

お前がこの後生きていられたら、ご褒美に『イイモノ』を上げよう。ゲームだ。きっと楽しいさ。子供は、ゲームが好きだろう？

ゲーム。心の中でその言葉を反芻した。現実味のない、この場所で、きっとこの美しいヒトもきっと夢なのだろう。ううん。夢だ。絶対に。全て全て夢なんだ。夢、夢、夢夢

夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢夢ゆめゆ、め。

さぁ、ゲームをしよう、みおん。

真っ赤な夕日に照らされた真っ赤なバスの中、真っ赤に染め上げられたその中で、私は意識を失った。

零話目（後書き）

異世界物、大好きです。
でも自分で書くのは・・・やっぱり難しいです・・・。
てか冒頭から頭イッちゃってすみません。

壱話目　錫の音、後、落下

うーんと小さい時、私は悪魔に会った事がある。

なんだか【不思議な能力】を貰ってしまったらしく、それ以来【不思議な存在】が見える様になってしまったのだけれど――まぁ嫌な目に会った事はあれど、不自由な思いをした事はないので無問題だ。

でもねぇ、これはどうかと、思うわけですよ。

ハァと溜息を吐いてぐぅるりと辺りを見回した。

私は日本の何処にでもいる普通の女子高生だ。これと云って部活動が優秀なわけでも、これと云って偏差値が良いわけでもない普通の公立高校に、今年の四月に入学したスカートの丈とか、テストの点数とかを気にする普通の女子高生、それが私だ。所属している部活は家庭科部。お裁縫とかお菓子とか作ったりするそれなりに楽しい部活だ。みんな結構勝手にしてる、ゆるゆるなところがポイントだ。時刻は五時半。もうそろそろ帰ろうかなーと製作途中のマフラーを鞄につっこんで被服室独特の丸椅子を机下のスペースに入れた。サッカー部の彼氏を待つ部長に、また来週と手を振って冷え冷えとした廊下に出た。

「う、わ・・・さむ」

うちの学校は廊下が吹きさらしなのだ。冬は風がビュウビュウと当たって容赦がない。あまりの寒さに身が縮み奥歯に力を込めた。無意識のうちに全身に不必要な力が入ったので、解す様に大きく息を吐き肩を下げる。さむっ！と慌てて鞄からマフラーを取りだす。濃

い茶色に雪を模した白や薄黄色の結晶と、端にはもふもふの玉が付いたお気に入りだ。しかしかなり年季が入っているため少し解れている個所がある。被服部に入ったのだし自分用に縫い直してみようと今は白と黒のボーダーのマフラーを制作中だ。今日は金曜日だしこれは土日中に完成かと一人微笑み慌てて頬を引き締めた。危ない危ない。一人で笑ってるなんて誰かに見られたら気味悪がられる事請負いだ――

そこでハタと気付いた。

この学校は別に県内有数の進学校というわけでもないがそこそこ勉学にも部活動にも力を入れている（あくまで、そこそこ、である。そこら辺は押して測るべし）。そして、毎週末には週末課題なるものが出てくる。

バッと鞄の中を見た。

・・・・・・・・・・ない。

この世で最も忌むべきわが宿敵――数学の問題集が。

おおうそうだよねそういえば先週の課題提出返された後こんなもん見たくないわとロッカーに投げ入れたまま入れっぱなしだ・ぜ☆

って　あ　ほ　か　！すぐさま鞄を閉じて自分の教室へ足を向けた。

そう、向けた。向けた、はず、だった。

シャン、ジャラン、と錫の音が。

ジャララン、リン、と涼やかに。

リン、と一際大きく聞こえたその瞬間。

グニャリと世界が捻じ曲がって足許が――そりゃもうバラバラと――崩れ落ちた。

「え、ちょ、なっ・・・はぁあ?!」
ちょっと待てええええてかふざけんなあああああああああああ!!!!

思わず閉じていた目を開け、現在。見渡したそこは信じたくないが森の中。
新緑の若葉が金色の光と涼やかな風と戯れている。地面には柔らかな下草と大きく隆起した木の根っこ。その根を覆う青緑色をした苔。飛び回る薄青色の蝶々は木漏れ日の中をまるで妖精みたいに駆け回っている――おいおいおいおい今何月だと思ってるんだいＹＯＵ達。北風小僧が風邪を引く季節だぜ?なんでこんな小春日和どころかちょっと暑いんだよ　お　か　し　い　だ　ろ　！

私は立ちあがってプリーツスカートに付いた土埃を払った。ポケットに入っている携帯を取り出して確認する。が、圏外。そりゃね！なんか山奥っぽいしね！うん、予想してた予想してた！・・・くそぅ、絶対駄目だ。パニックになんかなるな自分。なせばなるなさねばならぬひとのみちって奴だよ！頑張れ自分。負けるな自分！
ぐっと携帯を握りしめて深呼吸をする。森林浴！マイナスイオン補充！エネルギー満タンであります隊長！と良く解らないままテンションに任せて自分を鼓舞する。

取り敢えず！第一村人――別に町民でも人なら何だって良い――を探しに！いざ行かん！！と勢い良く歩きだした私は木の根に躓いて危うく転倒するところだった。

・・・・・・大丈夫だろうか自分。

と大きな木の幹に抱きつきながらまた大きく溜息を吐いたのだった。

壱話目　錫の音、後、落下（後書き）

また当分主人公の名前が出てこないパターンｏｒｚ
気長にお待ちください。

弐話目　初遭遇　前篇

付けていた腕時計を見ると時刻は午後七時。つまりあれから約一時間半経ったという事だ。
まだ、誰にも会えておりません、隊長・・・。もう、泣いても良いですか？

フゥと軽く溜息を吐いて木の根に腰を下ろす。慣れない山道にローファーで挑戦するのは流石に拙かったなぁ、と一度脱ぐ。学校指定の紺色の靴下には靴ずれでできた傷から滲んだ血が見えた。生憎と、絆創膏の持ち合わせはない。胡坐を掻いてフンっと鼻を鳴らした。
此処が何処だか知らないし、自分が何でこんな所に居るのかなんて全然解りはしないけど、こう云う【不思議な事】は大抵あの悪魔が云った【イイモノ】のせいなのだ。
別に私にとっては【イイモノ】でもなんでもなかったけど！
ただ単に【感覚】を鋭くされたのと、ちょっと病気がちだった身体が丈夫になっただけだ。
サンサンと照りつける太陽が憎いぜと木漏れ日を見上げる。本当に、勘弁して欲しい。足は痛いし疲れたしお腹も空いた。あ、そう云えば鞄の中にお菓子があるんだった。と鞄をゴソゴソと漁る。チョコクッキーは昔から大好きだ。唯、一応お年ごろとして、チョコは控えなければならない。油分が多すぎる。最近は結構我慢にしていたけど偶にはいいかなと作ってきたのだ。教室用はみんなで綺麗に完食したけれど、部活用は今日私と部長しか来ていなかったので半分も消費されていなかった。タッパーを開けてモグモグと口を動かす。考えてみれば、今、結構間抜けな絵面だと思う。ウチの学校の制服は正直云ってすごくって訳でもないけれどそれなりに可愛い。白いワイシャツに襟元と袖を止めるボタンは黒。赤色のリボンに黒に近い紺色のブレザーに赤いチェックの入ったブレザーと同色のプリー

ツスカート。黒い髪を茶色いシュシュでポニーテールにしている女子高生が大きな木の根っこに腰を下ろして胡坐を掻いてチョコクッキーを貪っているのだ。中々にシュールじゃなかろうか・・・。まぁまず胡坐をやめようかと足を伸ばす。体育座りだともし真正面に誰かが来た時中が見えかねない。まぁスパッツは穿いているけれど。踵に靴ずれがあるので微妙に横に向ける。タイツが汚れるけど、まぁそんなに気にするほどでもないかなと今度は水筒を取り出して中に入れてきた紅茶をゴクリ。

『ねぇ、あれなにかな』
『おいしそう・・・あまいにおいがするよ！おきつねさま！！』
『えぇい！黙っておれ幼子たちよ！あの者に気取られたらどうするのじゃ！！』
『おきつねさまこそ、うるさーい』

うるさ―いと小さな子特有の甲高い声で唱和されて【オキツネサマ】とやらは言葉に詰まった様だ。実はさっきから――と云っても此処に座ってからなのだけれど――気付いていたのだ。ゴソゴソと聞こえる会話に。そしてその声が小さな子供の様に聞こえると理解した時、私はお菓子を出すことにした。だってさ、ほら、子供って、甘い物に釣られるでしょ？【不思議な存在】である彼らはそう簡単に甘いものなんて食べられないだろうし、これで釣るっきゃない。というか、いい加減独りで淋しかったのだ。話し相手が欲しい。

「あーやっぱチョコクッキーはおいしいなぁ~ 最高だね！全くこれを食べた事の無い人が気の毒でたまらないよ！居るんなら分けてあげたいなぁ！」

多少わざとらしいのは、しょうがない。流石にそこまで思いながら食べているわけではないのだから。しかしあちらさんには効果絶大

だったようである。シン・・・と一瞬静まり返ったかと思うと俄かに草叢が賑やかになり『えぇい、解った！妾が行ってきてやろうっ！』と女性の（様な）声が聞こえたかと思うと、一瞬で辺りが薄暗くなる。
おや、と思っているとふよふよと大きな赤と青の火の玉が浮かび、頬を生温かい風が撫でた。ガサリと草叢が揺れて、出てきたのは美しい一匹の狐。目の下に赤い模様のある美しい白金。その尻尾は、九つ。これが昔話とか漫画とかに出てくる九尾って奴かぁと一人感動しているとその美しい獣は『娘や』と囁いた。静かで妖艶なその声に驚き目を見張ると、もう一度『娘』と狐は口を開く。

『何故、この様な場所におるのだ？此処は人の子は入れぬ場所。娘や、娘。お前はなぜ此処におるのかや？』

強い【能力】を感じた。思わず息を潜めるほどの。そう云えば九尾ってすっごく永い時間を生きた狐が【能力】を持って成る姿の事だったっけ。猫又になら会った事があったのだけれど、九尾はそれよりも強い【能力】を持っている様だった。

だけど、その昔出会った悪魔と比べたらこれくらいなんでもない。
それに今の私には情報が必要だ。
何故自分は此処に居るのか。
誰に連れてこられたのか。
どうやって此処まで来たのか。
どうやったら帰れるのか。
私はあのゲームから生きて帰ったのだから、これぐらい、なんともない。

そう、大丈夫。怖くなんかない。
震える掌を固く握りしめた。

弐話目　初遭遇　前篇（後書き）

主人公、一応女の子だもんで。
ちょっぴりですけども不安で怖がっとります。

弐話目　初遭遇　後編（前書き）

弐話目、まとめれば良かったかなぁとちょと後悔中。
取り敢えず自覚編です。

弐話目　初遭遇　後編

『何故、この様な場所におるのだ？此処は人の子は入れぬ場所。娘や、娘。お前はなぜ此処におるのかや？』

グッと相手を見据えてニッと笑う。引き攣らない様に、余裕を持っている様に。取引って云うのは初対面が肝心だと思う。相手に舐められない様に空気を自分の物に。

「それに答えてあげても良いですよ。なんならこれだってあげます」クッキーを一枚掴み上げて云う。パタリと相手のふさふさしていそうな尻尾が右から左へ一度動いた。

『ふむ、娘、お前は何を望む？事によっては聞き入れんでもないぞ』

きた！本当ですか？と笑みを浮かべながら心の中でガッツポーズを決め込んだ。なんだ草叢のオチビさん達だけじゃなくて、この狐さんも食べたかったんだ。可愛いなぁ。と元来もふもふした動物が大好きな私は内心少し妖しい笑みを浮かべた。大丈夫、犯罪者になるつもりは（まだ）ございませんよぉ皆々様！と誰かに揉み手をしながら云い訳を試みる。

まぁそれは置いといて。真剣に狐さんの目を見詰めた。

「実は、私は何者かに此処に連れてこられたようなんです。どうしてなのか、どうやってなのか、此処が何処なのかも解りません。此処が何処なのか、教えてください」

まずは情報収集。此処が何処なのか。解ったら帰れるかもしれない。一応お金ならちょっとだけだけれど持っているのだ。何とかこの山から下りて交通機関を駆使して帰らなければ。下山に時間が掛るか

もしれないけれどこの暖かさなら凍死とか云う憂き目にあう事もないだろう――熊とか猪に襲われなければの話だが。

『そうであったか・・・！娘、お前、それは難儀しておったのじゃなあ。良かろう。妾が教えてしんぜよう。此処は人間達が作った都の近くにある霊山、名を恵濃廟謳山（えのびょうおうざん）。』

「えの、びょ・・・・・・って・・・・み、都？東京・・・？ってもしかして京都？！」

おいおいおいおいおい！何処まで遠くに来たんだ自分・・・所持金は三千円、に、満たない（これでも今日は持ってる方だ）。こうなったら警察に嘘の被害届出して誘拐をでっちあげるか・・・などと考えていると『トーキョ？キョォト？』と訝しげな声が聞こえた。

『妾は今まで人間の都がそのように呼ばれているのを聞いたことが無いがのぅ』

「へ？」

『人間達は都の事を【宵明けの都】と呼んでいるぞよ？【宵明都（ショウミョウト）】との』

「ショーミョー・・・ト？」

ちょっと待て、なんだその名前。そんな中華な名前聞いたことないぞ。歴史は好きだけど地理は取ってないから☆なんて云って云い訳できるレベルじゃない。流石にそんな名前のところがあったらびっくりする。しかも都ってなんだ。今は県とか府とか道とか・・・都が付くのは東京だけだ。だのにこの狐さんは、そんな所は知らないと云う。

いや待て。落ち着くんだ自分。もしかしたらものすっごい訛ってる人が「～京都」って云ってるのを区切りを間違えて「ショウミョウト」って思いこんだんじゃなかろーか。ミョウトならキョウトと聞

き間違えてもそこまで可笑しくない。うん、そうそう！相手は狐だもんね！動物だもん文化（？）が違うもんね！と納得しかけていると『うん？』と狐さんが首を傾げまた尻尾を今度は左から右へとパタリと動かした。

『むむ？おい、娘。――もしやお前、この世界の人間ではないな』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・・ぁ？」

『ふむ、やはり色濃く外の世界の匂いを感じる。娘や、お前は外の世界で【印】を渡されておるのだろう。強い【異能】じゃろう・・・それで妾の事も怖がらぬのじゃな。納得したぞ』

「そ、外の、世界？え？街の気配って、事？」

『うん？それもあろうが・・・なんじゃ、此処が自分の世界ではないと知らなかったのか？』

なんて云った？この狐さん。そんなまさか。外の世界って、なんだよ。

嘘、だ。だって、そりゃ悪魔の御陰で【不思議な存在】を見えるし話せるし触れられるようになった。

だけど、別に魔法の力を手に入れたわけでも、すんごい怪力を手に入れたわけでもない。

私は普通に女子高生をしてて、スカートの丈とか、テストの点とか、友達と話したりとか、恋に夢見たりとか、そう云う事に全力出してて。

そりゃ普通じゃない事もあったと思う。だけど、私は、そんな、異世界とか、嘘、だ、よ、視界が歪む。ぐぅにゃりと、揺らめく。

ボロリと目尻から何かが伝って、頬から顎へ、そして顎から伝い落ちた。

嘘だ。

ポツリと一言呟いて私の意識は闇に落ちた。

弐話目　初遭遇　後編（後書き）

嘘だ、嘘だ。と幼子の様に涙を流す娘を自分の尾の中に入れる。
幼子たちは心配そうにしながらも地面に落ちた【焦げ茶色の丸いもの】に気を取られてチラチラと見ている。その様子に頬笑み、柔らかく声をかける。

『それを、拾っておあげ。まだ食べてはならないよ。この娘に許可をもらってから、お食べ』

『はーい』と無邪気に返事をした幼子たちを連れて自分たちの住処へと帰る。
自分たちが厄介になっているあの坊主が、この娘を見てどうするか、それは火を見るよりも明らかで。

フゥと溜息を吐き暮れてきた陽を見ながら『しょうのない主じゃて』と呟いた。

参話目　初めましてのご挨拶

赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
おなかの右がわが、もえてるみたいにあつくて、いたい。
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
あつい、いたい、たすけて。パパ、ママ、いたいよ、いたい。
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
みおんって、おねがいだから名まえをよんで。これくらい、ガマンするから。
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
おねがい、パパ、ママ。いなくなったりしないで。

伸ばそうとした手は、しかし伸びなかった。何故ならそこに布団があったから。嫌な夢見たなぁ、と頭を掻きながら起き上がる。目尻からボロリと夢の名残が零れ落ちた。それから目を背けたくて目をきつく瞑る。そしてもう一度ゆっくりと開ける。
そこは薄暗い、静かな和室だった。白い布団。日に焼けた畳。花の描かれた襖。外から烏の声が聞こえ、ふと見ると西日が襖から漏れている。あぁ、夕方なんだ。と、そう云えば今日二度目の夕陽に思わず笑ってしまう。
スルリと布団から出ると、シュシュとゴムが枕元にあるのが見えた。多分、服は脱がせ方が解らなかったんだろう。狐さんだし。シュシュとゴムはきっと普通の髪止めと似たものだし外せたんだろう。で

もきっと苦労したろうなぁ。狐文化にゴム製の髪止めなんてものはないだろうし。
私は手櫛で適当に整えてゴムで止める。その上からシュシュを付けて壁際に在った鞄を手に取った。取り敢えず、狐さんを探しに行こう。そんで、お礼を云おう。まだ寝ぼけてふわふわしている頭は『狐さんが純和風の一軒家を持ってるのって、可笑しくない？』なんて疑問を沸かせなかった。

「おや？」
「ふぇ？」

とてとてと夕日の沈む山を見ながら渡り廊下(みたいなところ)を歩く。
何気に、この家、でかいぞ！となにやら悔しい様な気分になった。
私が今さっきまでいた所は所謂『離れ』って奴だったらしく板張りの廊下を良く解んないけど石とか木とかがきっと風流人の心をいたく刺激するようなそんな配置がなされているのであろう庭を横目に本館（本邸って云うのかなぁ？）を目指す。引き戸を開けて中へ入ると、

『妾が呼びに行くまでもなかった様じゃのぅ』

艶やかな美女がそこに居た。

どうぞと差し出されたお茶をどうもと少し頭を下げて頂く。目の前の男性も彼女からお茶を受け取り、ありがとうと柔らかく微笑む。もしかして夫婦なのかな。と首を傾げる。でもこの人は間違いなく人間の様な気がするのだけれど。としげしげと眺めているとこちらを向いた男性は「いやぁ」とご自分の丸めている頭を撫でた。なんだか照れているようだ。

「まずは、お名前をお聞きしても？あぁ、私の名前は安重（あんじゅう）。安心の安に重なると書きます」
「あ、えっと、はい！私は稀木弥音（まれぎみおん）って云います」
ナイスミドルめ！なんて素敵に微笑むんだ！しかも安心が重なるって・・・名は体を表すってのはこの事だね。ってくらいほんわかしてくるよこの人っ！
「まれぎみおんさん。ですか」
「はい、稀木が姓で弥音が名です。珍しいって意味の稀と、植物の木で稀木。最上って云う意味の弓偏の弥に音で弥音です」
「名字をお持ち・・・と云う事は、何処かの貴族の出の方でいらっしゃるのでしょうか」
あぁ、成程。こっちではそういう決まりなのか。日本も明治維新前まで名字認められてなかったもんね。
「そういう訳ではないんです。私の居た所では皆名字を持つのが決まりなんです。ですから別に硬くなさらないで下さい」
「そうですか。では名字と云うものは呼びなれないので弥音さんとお呼びしても？」
「どうぞお構いなく」
ナイスミドル安重さんはにっこりと微笑んで脇に控える狐さん（多分）を手招きする。安重さんの横に並んだのは、艶やかな美女。何重にも来ているはずの赤い着物からも、彼女の身体の線が解る。見事なまでのぼんきゅっぼん！だ。白金色の長い髪の毛は黒い簪で結いあげられ、同色の長い睫毛に縁取られた釣り上がり気味の深紅（ルビー）の瞳。目の下には艶やかな赤い模様。唇は品良い紅色。思わず姐さんと叫びたくなる。
「私の妻の禮來（らいらい）です」
「あ、の。奥さん、なんですか？」
『ほれ見ぃ、安重。気取られておるだろう？この娘は強力な【異能】に【印】を与えられておる。妾の【能力】ですぐに気付くじゃろう

て、とな』
「いやはや、確かに強力な力を感じますね。恐れ入りました弥音さん。――驚かれていますか？【異能】を妻に持つ私を」
「驚きました、けど、でも・・・こんだけ綺麗な人なら納得、かなぁ。って感じ、です」
「ありがとお」

二人して見つめ合うその姿はなんだか別世界みたいで。
本当に、愛し合っているんだなぁとなんだかあったかい気分になる。
思わずニコニコして二人を見ていると。不意に二人の視線がこちらに移る。

「では、弥音さんの状況を詳しくお聞きしてもよろしいですか？」

さて、本題に入りますか。

肆話目　幼児に目覚める？（前書き）

目覚めないよ！何このタイトル？！ふざけないでよ！

と怒られそうです。

因みに作者は目覚めたことがありませんが、美少女は世界の宝だと思います。

というか、美形は世界遺産だと思います。

肆話目　幼児に目覚める？

私、稀木弥音は女子高生。これと云って部活動が優秀なわけでも、これと云って偏差値が良いわけでもない普通の公立高校に、今年の四月に入学した、普通の女子高生。スカートの丈とか、テストの点数とかを気にする、家庭科部に入っていて現在マフラーを制作中の普通の、至って平凡な、女子高生。ちょこっと【不思議な能力】を持っているだけの、普通の、至って平凡な、何処にでも居る、女子高生。

そんな普通の（以下略）女子高生の私は今、狐さんの家でご飯を食べています。

食卓には一汁三菜、バランスの整った御膳。どれもすっごく美味しい。人間、美味しい物を食べると幸せになれると思う。なんか考え方がポジティブになっていく。我ながら現金だとも思うけれど。話を聞けば聞くほど平安時代に似ているこの世界は、だけどやっぱり異世界の様で、この時間に存在していたはずの物に揃って首を傾げていた。歴史の教科書を使用したので間違っていないだろうと思う。

でも、まだ個人的に時代・遡ちゃった☆説を諦めきれない。だから心の片隅に置いておこうと思う。

『ははうえおかわり！』

『おかわり』

『ははうえ、みおんとあそびたいようっ』

今のは上から安禮（あんらい）、安楼（あんろう）、來胡（らいう）。お二人の『愛の結晶』って奴だ。見た感じ四、五歳に見えるけれど、本当は私よりも年上らしい。・・・

・私がこの場で一番年下、なのだ。

「よし、遊ぼうか。何して遊ぶ？」

『これたべるー』

正直云って、子供って奴はあんまり好きじゃない。何を考えているのか解らないし、小さくてふわふわしていて壊してしまいそうだし、気を使いすぎてしまう。可愛いとは思う。でもあんまり傍に居て欲しくない。でも、なんだか癒される。まぁ、一宿一泊の恩。返さなきゃ女が廃るって奴だ！と奮起して笑顔で唯一の女の子來胡ちゃんの持っているものを見る。

「て、えぇ？」

『ね、たべていーい？たべていーい？』

紛れもなく、私が食べていたチョコクッキー、だ。そう云えば落としたのかあの時。と納得すると同時にハッと気付く。私、あの時倒れたんだからあのクッキー砂まみれなんじゃ――。

「だだだ駄目！一回落ちて砂まみれでしょ？！汚いよ！」

『もうすなおとしたよ！きたなくないもんきれーだもん』

『弥音、安心せい。砂の精に云って砂は落ちたし汚くない。幼子たちはそれを食べたくて仕方ないのじゃ。許可してやってくれ』

ころころと笑いながらこっちを見る禮來（らいらい）さんに押されてどーぞ！と半ばやけっぱちに叫ぶと今さっきまでご飯を食べていた安禮君と安楼君も『たべる！』と飛びついてきた。おおぅ自作クッキーが此処まで期待されるとなんか緊張してくるなぁ。

『おいしい！』

『あまいね、あまあまだねっ』

『らいもろうも、おくちのなかがまっくろだよ！』

三人できゃあきゃあ云ってるのを見て「後で一緒に歯磨きに行こうねー」と促す。『はーい』と声をそろえる三人に思わず身悶えしそうになった。おおおおお落ち着いて、落ち着いて私！ロリもショタも別に好きなわけじゃないのに！弱点じゃないのにっ！恐るべき無邪気なお子様効果！

因みに草叢に居た時、三人のうち一番年長の安禮君以外は今のまま人型だったらしい。安禮君は『おきつねさまのしゅぎょー』って奴で狐でいられる時間を伸ばしてる訓練の最中なんだとか。安楼君は少しの間しか狐の形になれないので安定の訓練中。來胡ちゃんは変身を完璧にする訓練をしているらしい。閑話休題。

三人を連れ立って歯磨きに出掛ける外の井戸で水を汲んで専用の木の棒を使って噛むように歯を磨く。「よーく洗うんだよ」と云うと『うん！』と元気のいい声。ごっしごっしとそりゃもう勢い良く洗う姿に思わず目を覆う。もう駄目だ犯罪者になりそう。

『まだ磨いておったのかえ？そろそろ風呂に入ろうぞ。禮と楼は父上と入るのだぞ。弥音と來胡は妾と一緒じゃ』

「はい。はい、みんなもう一回うがいしようね」

皆一緒にぐちゅぐちゅぺ！とやる仕草に思わず悶えそうになりながら歯磨きを終えた。

お風呂はなんていうか、目のやり場に超困った。禮來さんのないすばでいに自分が女ですみません！とささやかな胸を抱きしめて土下座したくなった。

いいいい一応これでもBかっぷ・・・！Aじゃないんだよギリギリ・・・！と叫びたくなった。と云うか実際ブツブツ云っていた。不思議そうな顔をされたけど、ね（だって女の子だもん。一度は憧れるじゃん巨乳に！）！露店風呂みたいな――とは云え決して外から見

えない様に板とかがちゃんと立てられている――外にある大きなお風呂。
この世界は月が大きい。豆粒みたいだった私の世界とは、また大きく違うところ。
『ははうえ！かみ洗って』と無邪気にねだる來胡と優しく笑いながら洗う禮來さん。二人との間に、大きな壁を感じて、私は湯船から出られなかった。
そして物の見事に、逆上せてしまった。

お布団の中で、私は必死で考えた。
此処は異世界で、私はなんのチカラもない子供。
チカラっていうのは彼らが呼ぶ【異能】って奴じゃない。経済力とか、生活力とか、そう云った生きるためのチカラだ。この世界の常識を殆ど知らない私はほんの小さな幼子。幼子は保護者がいないと生きていけない。でもこの世界に、当り前だけれどそんな人、いない。居るはずがない。
この家の人たちが頭に浮かぶ。云ったら、良いですよ。って云ってくれそう。
安重さん住職さんらしいし。困ってる人を見過ごせない性質みたいだし。
ツキリと胸の奥が痛む。良くしようとしてくれてる人を利用しようとする汚い私。でもそんなの、ずっと、ずぅっと昔から、だ。でも、胸が痛い。でも、死にたくない。

グルグルグルグルと頭の中でそればかりが浮かぶ。嫌だ、こんな所で死にたくない。元の世界に戻りたい。恩返しを、したいんだ。きっと一生掛っても返しきれないけれど、それでもこんな私を、見返りなんて求めずに受け止めてくれた人たちに最大限の感謝と恩を。だからまだ死ねない。仕方がない、利用することになっても、家事とか子守とか何か仕事を――と、そこでハタと気付く。

そうだ。だったら、仕事を貰おう。住み込みで働かせて欲しい。これでどうだ。
これなら別に私は良心の呵責に耐えなくてもいいわけだ。グッジョブ私！ナイスアイデア！
よしよし、早速明日にでもお願いしてみようと、白みかけた空に私は一人、ほくそ笑んだ。

肆話目　幼児に目覚める？（後書き）

やっと、動き出しそう、です・・・。
深夜に打ってるので誤字脱字が激しく不安です。一応二度見たんですが・・・・。
誤字脱字報告、よろしくお願いします！

伍話目　新しい朝が来た

『みおんーあさだよーおきてよー』

えぇー？まだ眠いよぅ・・・。もうちょっとだけ・・・。後、５分だけ・・・。

『ごふんってなーに？ねぇ、はやくおきなきゃあさごはんなくなっちゃうよぉ』

うるさいなぁ・・・疲れてるの、眠いの、もうちょっと寝るんだい――

『もう！み・お・ん～・・・ぉおっきっろおおおおう！』

ぐぇえっ？！

おはようございます。朝っぱからお子様三人に圧し掛かられて内臓飛び出すかと思いました弥音です。お子様って云っても一人約１０ｋｇちょっと・・・うん、まぁ居候の癖に眠いとかそんな甘えた事云ってちゃ駄目だよね。ご飯とかも厄介になってるんだから。・・・痛かったとか・・・重かったとか・・・もうちょっと寝たかったとか・・・唯でさえ昨日あんまり寝てないのにとか・・・そんなこと、思ってはならない。いけないんだ。

井戸で顔を洗いながら溜息を吐く。今の季節は春。も、盛りを過ぎて若葉の美しい初夏に近づいてる、ぐらいの季節みたいだ（こっちでは【終わりの春】と呼ぶらしい）。井戸水はひんやりとしていて気持ち良いと云うよりちょっと冷たい。今は個人的な感覚としては

7時前っていうか6時半くらい？なんとなく日が上がってなくて肌寒い。

『おや、起きたのか・・・。幼子たちが無理やり起こした様じゃのう』

「いやいや・・・お世話になってる身ですから。流石に何時までも寝ておくわけには」

朝御飯を用意しながら私に眦を下げて禮來さんが云う。云いながら子供たちを軽く睨む。・・・お母さん、強いですね。綺麗なだけに迫力も十二分。睨まれた子供たちはシュンと俯いてしまった。子供たちはきっと良かれと思ってやってくれているわけだし、ただ飯ぐらいの押しかけ人なのだから何時までもぐーすか寝ていられない。それに、お願いもあるし。顔の前でパタパタと手を振って笑う。それから「いただきます」と手を合わせて朝御飯を食べる。本日のメニューは焼き魚と玄米らしきご飯と味噌汁、胡瓜と白菜の御漬け物だ。昨日もお魚が夕飯に出ていたけれど、普段着が着物って時点で冷蔵庫が在るように思えないので（偏見）きっと川が近いんだろう。

「ごちそうさまでした。とっても美味しかったです！あの、禮來さん。後でお話があるのでお時間があれば安重さんも呼んでいただけませんか？」

『お粗末様じゃ。そうじゃのぅ・・・安重は今、庭で掃き掃除をしておるが・・・もうすぐ帰ってくるじゃろうて。暫し待っておれ』

私が寝こけてのんびりしている間に家主さんが掃き掃除・・・なんか、先行き不安すぎる。安重さんっていつも何時に起きてるんだろう・・・。どうしよう。今度からちゃんと起きれるのか・・・・・・すっごく不安だ。

「それで、お話とは？」
それから禮來さんと一緒に洗いものを片付けた後お茶を淹れて待つ事数分。「お待たせしてすみません」と安重さんがやって来た。いやもう、寧ろなんのお手伝いもせず申し訳ありません。と二人で謝り合っていると禮來さんに呆れられた。うん、確かに二人で謝り合ってる姿は結構滑稽だとは思うけどね。改めて腰を下ろした安重さんに促され、私は背筋を伸ばした。

「あの、私此処が異世界にしろなんにしろ、どうやってでも生きて、家に戻らなくちゃいけないんです。だから、此処に置いて頂きたいんです。その代わりに、お手伝いをしたいんです」
『手伝い、じゃと？』

訝しげな禮來さんの声に逆に私は、はい。と一度お茶を飲む。ドキドキする。断られたら街の場所を聞いてそこで仕事探しをしようとは思うけれど、やっぱり拒否されるのは、怖い。できれば受け入れて欲しい。例えそれが我儘だとしても。

「働かざる者食うべからず。です。なんだってします。料理でも掃除でも洗濯でも、なんだって。あ、でも宗教には明るくないので安重さんのお役にはあんまり立てませんけど・・・」

これでも・・・これでもじゃない、立派なうら若き乙女なんだ。この歳で出家はしたくない。と云うかできれば頭を丸めたりしたくない。いや、生きるか死ぬかで髪の毛に拘るのもどうかと思うよ？！どうかと思う。だけど、できれば、できれば剃りたくない・・・！！けど、でも、

「でも、生きたいんです。生きて、帰りたいんです。お願いします」

ざ・じゃぱにーず・土下座！お願いです。きっと許してくれるとは思うけれど（私は結構打算的なんだ。二人とも優しいし、許してくれるだろうなって云う予想を立てた上で云っているのだ）許してくれるまで頭を上げないぜ！ってくらいの心意気で行こうと思う（されないと思っても、拒否されたらって考えると、やっぱり怖いのだけど）。

「顔を上げてください、弥音さん」と穏やかに云われ、おぉこれは「娘さんを僕に下さい」と云われたお父さんが土下座した婚約者に許可を出す前の台詞じゃないか！キタコレ！と神妙な顔を崩さず顔を上げる。するとにっこりと頷き合う御夫婦。そしてその笑顔のまま二人は此方に顔を向けた。

「良かった。実は此方からも弥音さんにお願いがありまして」

「お願い、ですか」

はて、もしかして子守だろうか。あぁ、広そうな家だからやっぱり掃除人には困っていたのかな。とぼんやり予想を立てる。しかし、目の前の住職さんと狐さんは予想外の事をのたまってくれた。

「妖怪退治、して貰えませんかねぇ？」

はいぃ？

睦話目　退治　はじめました（前書き）

役職とか全然わかんねえええええもうちょっと勉強してきます。
今年中の更新は難しいかと思いますが来年からもよろしくお願いします。
それではみなさん良いお年を＾＾

睦話目　退治　はじめました

「おい、そこのお前っ！娘の、娘の呪いは本当に解けるのだろうな？！」
「勿論です。御当主、呪いの様子を見る為に御簾の中へ入ってもよろしいでしょうか」
「ぐぬぬ・・・・・良いか。儂の娘に触れるでないぞ！良いなっ」
「勿論でございます。御当主の麗しい御令嬢に触れるなど・・・では、失礼しますよ」

顔を真っ赤にして怒鳴るうるささにバレない様に嘆息して中へ入る。ジャラリと畳と御簾の端で擦れて音が出る。うーん本当に平安時代みたいだな。御簾って！恋文で相手を決めるのか。相手の顔とか気にならないのか？また変な文化だよなぁ。と思わず小さく唸ると15，6くらいの女性がハッと息を飲んだ。あ、不安にさせちゃった？拙い拙い。

「た、退魔師様・・・わたくしはそんなに酷い呪いの掛っているのでしょうか・・・？」
「いえいえ、申し訳ありません。大丈夫ですよ。今から調べますからね。唯、お嬢さんのあまりの美しさに驚いてしまって」

優しく微笑むとまぁと云って目を丸くし、少し頬を染めた。なんだか幾分リラックスしたようで、表情が柔らかくなる。が、顔色が悪い。ここ数日気分が悪かったり夜も眠れなかったりで、食が細くなっているそうだ。まぁ原因を調べるも何も此処に大量に居座って遊んでいる小人みたいな――まぁ見た目は鬼だから子鬼なのだが――奴らのせいなのは解りきった事。

頭が痛かったり夜眠れなかったりするのはこいつ等が歌って笑って叫んでいるから。よく物が無くなったり壊れたりすのはこいつ等が悪戯で隠したり壊したりするから。２０匹ほどが我が物顔で屯っているのだ。これだけの数が騒げばその声が聞こえずとも頭も痛くなるし眠れないだろう。

「さて、ではやりますか」
此処一週間の授業の実習。なんだかちょっとだけわくわくする。
恨みはないけど思いっきりやらせてもらうよ。子鬼諸君。

「妖怪退治・・・ですか・・・？」
「はい」
「いや、私そう云う事した事ない・・・って云うかできないんですけど」

て云うか貴方の奥さん、妖怪だと思うんですけどー？！と思わず叫びそうになったがグッと我慢。まず妖怪退治ってなんだ。なんで。私？私は普通の女子高生。そりゃちょっと【不思議な存在】が見えたりするけど、でも退治とか人外な事できないっつーの。
目と口も大きく開けポカンとしている私の様子に禮來さんが首を傾げる。

『なんじゃ。そんなに強力な【能力】を持っておるのに使った事が無いのかぇ？それにその強力な【印】はなんじゃ。その【能力】はそう云うもんじゃろうて。お前に【印】を与えた者もそう云う使い方を想定しておったのではないのか？』
「私は、普通の一般人です！それに、あのヒトはが私にこの【能力】を与えた意図なんて解りませんっ。あのヒトは、あのヒトは唯・・・遊んでた、だけです」

私の、命を使って、遊んでただけ。無意識の内に右手がお腹を押さえそうになったけど、それを抑え込み軽く頭を振った。

「それに、私は今までこの【能力】を何かに使うだなんて考えた事なかったんです」

「ですが、我が家の家事は基本的に妻一人で切り盛りできますし、正直今人手が足りないのは私の方だけです。それにそんなに難しい仕事を回したりしませんよ。見えたり触れたりする方なら、予備知識さえあればこなせる物ばかりですよ」

家事の関係ではやってもらう事が無いって事は、つまりこの話が受けられないんなら雇えないって事だろう。私はグッと言葉に詰まり、柔和な笑顔の中に此方を探るように見る鋭い目に動揺し、下を向いた。・・・交渉事で、相手に自分が不利だと思わせる事はタブーだ。それは例えば今みたいに表情を崩す事だったり、視線を逸らす事だったり、瞬きだったり――そんなちょっとした事が交渉事、それも自分にとっては絶対に外せない事なら殊更慎重になるべきなのに――やってしまった。やっぱり、私ってどうしようもなく小娘なんだなぁと下唇を噛む。

生きたい、生きて帰りたい。生きて帰って恩返しを。別に良いじゃないか。多少普通じゃない事を、自分を誰も知らない世界でやったって。心配ない。大丈夫。もう、引きずり込まれたりなんか、しないさ。

ギュッと一回目を瞑りもう一度しっかり安重さんと禮來さんを見据える。

「引き受けさせてください」

それから一週間。日常生活に必要な最低限の事――着替えとか、読

み書きとか（最初の時点で漢字が通じていたのだから当り前とも云えるけど、やっぱり日本に似ている）（と云うか何より文法が一緒だったからかなり楽だった）――と一緒に妖怪についての基礎知識と簡単な対処法を安重さんに教えて貰った。

そして今朝。

漸くこの家の人達と一緒に食事ができる時間（日の出とともに起床）に起きれる様になった私は、安重さんの言葉に思わず咽た。

「大丈夫ですか？弥音さん」

「ごほっげほ、ごほごほ・・・・・だ、い丈夫です・・・。あの、もう一度云って貰えますか」

「今日、退治の依頼が来ているので行って来て頂きたいんですよ」

「あの、今日、ですか」

「ええ。今日の昼過ぎから、です」

マジかよお師匠サマ。にこやかに笑う目の前の人に思わず脱力。シャクシャクと白菜の浅漬けを頬張りながら「で、それはどんな内容なんですか」と促す。

「まぁ貴族のお偉い方からなんですがね。この人は一人娘の事を溺愛しているんですが、此処の娘さんが最近体調を崩していらっしゃるそうなんです。医者に診て貰ってもなかなか治らないし酷くなっていく一方。これは呪われているのではないかと云う事でいろんな霊媒師やら陰陽師やらを呼んでいるそうなんです」

「で、安重さんも呼ばれた、と」

「いいえ。呼ばれたのは昔馴染みの知り合いです。これはその人からの依頼で、どれだけ祈祷してもどうにもならないから助けて欲しい、と。祈祷師と云うのは宮廷や貴族お抱えでもなければ個人のお仕事ですからね。評判の善し悪しが生活に直結していますから、で

きなかったでは済まされません。このお仕事の注意事項ですが、基本的には弥音さんの好きにして頂いて結構です。唯、その祈祷師の方の名前を出す事と、相手は一応貴族ですから失礼のない様に振舞う事が条件です」

「はぁ。で、それって私でも大丈夫なんですか？」

「解りません」

・・・・・思わず、ずっこけるかと思った。実際は手に持ったお味噌汁が一瞬波立っただけだったけれど。思わずジト目で睨むとふふと、ナイスミドルスマイルを此方に向けられた。畜生。やっぱり美形って得だ。と溜息を吐く。

「一応私の肩書である【退魔師】として行って貰う事になります。・・・対処法が見つからなかった場合は、祈祷師の紹介ですし、適当に祈祷の真似でもして場を繋いでください。祈祷は、場合によっては何日か通ったりするものですからね。パッと見てできそうになければ誤魔化して私に報告して下されば構いません。・・・これはこの一週間の教えの査定でもありますから、頑張ってくださいね」

うん、まぁ一言で云うなら、案外簡単だった。庭にあった柊の枝を幾つか失敬してばっさばっさと子鬼を追いかけまわすイタイイタイと逃げる子鬼達が退散して行く場所を探すと、娘さんの日用品入れの中だった。鬼達が出ない様に慎重に中の物を抜き取り庭に出る。鬼だけになった箱の中に普通の米と豆2，3粒ずつ投げ入れ蓋を閉め振る。そりゃあもう棒ポテトの様に。すると中からギャアアアと悲鳴が聞こえ、タスケテタスケテ！と聞こえた所でピタリと振るのを止める。中からはまだイタイ！と引き攣った声がしている。

「これ以上痛い目に会いたくなければもうこの娘さんを襲わないと云え。そうでなければもっとするぞ」

ヒイ！と悲鳴じみた声が聞こえ「モウシナイ！モウデテイク！」と叫ばれる。
「ココハ【気】ガタマッテタカラ、アソンデテタノシカッタケド、イタイノハイヤダ！」
キーと一声叫んだの聞き終え蓋を開け箱を逆さまにする。子鬼達はバラバラと落下し慌てふためきながら去って行った。生憎とそういう溜まった【気】を具体的にどうすれば良いのか解らないので何とも云えないが取り敢えず第一関門終了、だ。呆然とこっちを見ていた見物人ににこやかにそりゃもういっそ爽やかに云ってやった。この中に悪い物の怪が入っていたので退治させて頂きました。また明日来ますので。そしてもう一度御簾の中へ入りこの件の被害者である女性に話しかける。

「お嬢さん、この中に貴方を悩ます物の怪が入っておりました。ですが今もう居ません。どうしますか取り敢えず櫛などはこの中にお入れしてもかまいませんか」
「え、えぇ・・・。構いませんわ」

丁寧に中身を戻してから中に一応魔除けの米と柊の枝を一枝入れる。・・・この箱がこの方角にあったから子鬼は住処にしたんだろうけれど、念ため、だ。柊はともかくお米は他の奴らにも効くし。それから娘さんに断ってから箱があった近くの柱に今さっき書いた紙を張った。気が溜まらない様に逃がす呪文。多分これで良いはず。多分。応急処置くらいにはなっている。はず。・・・安重さんに確認して対策を聞いて、明日また来る事にしよう。

「今はあまり道具が無くて・・・取り敢えずで恐縮ですが、応急処置は済みましたので。明日、また参ります」

にっこり微笑むと相手は忽ち顔を真っ赤にした。そのあまりにも初心な反応に一瞬疑問を持ったけれどすぐさま打ち消す。
平安時代の身分の良い女性は異性との接触が禁じ方が極端だ。それに彼女の父の性格を考えると本気で親族の男以外見た事が無いんじゃなかろうか。自分の様に祈祷師や霊媒師などが御簾の中に入ったりしただろうが、貴族の徐霊で来た人は基本的に年食ってる実力者っぽい人たちばっかり来てるみたいだし（此処に来てすぐ通された待合室みたいなところで会った祈祷師さんたちは４０代ぐらいのおじさんばっかりだった）。同世代の異性（と聞かされている人間）と会うのは初めてだろう。

え？何か可笑しいって？気のせいじゃないだろうか。
私は稀木弥音。『大方』普通の女子高生だ。

「それでは失礼」と禮來さんに習った正式な礼をして場所の元を去る。彼女の父にも同様に。擦れ違いざま、お手伝いらしき女性がキャアと声を上げた。

「ほら、あの殿方よ！噂通りとっても凛々しくて可愛らしい方ね！」

私は稀木弥音。『大方』普通の女子高生だ。
ただ今『男装』して、退魔師見習いをやってます。

誰か私に普通を返してえ！

睦話目　退治　はじめました（後書き）

やっと男装ネタ入れれました！キーワード嘘になったらどうしようかと↑

男装の理由は次から。

質話目　お散歩（前書き）

更新停滞&いまだにヒーローの出てこない話でもうしわけないです（，・ω・、）

ううー次には出せるはず・・・です。

質話目　お散歩

【気】の溜まりをどうすればいいのか。
簡単に云うと、風水みたいな感じで『青色の花瓶を置く』とかなんとかすれば良いらしい。
「取り敢えず花瓶を売りつけてこい」と云う旨の事を丁寧に、笑顔で仰った我が師であり家主でもある安重さんに「ついでに観光でもしてきたら如何ですか？」と提案されたので朝御飯の時に御握りを数個作って少し早めに寺を出てみた。

現在私がお世話になっているのは、緑が生い茂る山々――をまとめて恵濃廟謳山と呼ぶらしい。話によるとみんな恵濃山（えのやま）って呼んでるらしいのだけど――の中のちょっと小振りな山の中腹にある重峯寺と云う御寺だ。私は重峯寺の近くにある禮來さん達の修行場所辺りで倒れたらしい。――なんだか変な場所に紛れ込んでいたんだなぁと少々自分に呆れてしまった。

ふっと足元に視線を向ける。そこには舗装なんてされていない剥き出しの大地。足袋に包まれた足を見ていると自然と溜息が洩れた。情けないことに昨日出歩いた際に鼻緒の部分で思いっきり靴擦れを起こしてしまった。安重さん達は驚いていたけれどそれこそ現代っ子を舐めないで欲しい。帰りなんて半泣きだった。靴擦れを起こした部分は安重さんに魔法（【癒しの術】という【方術】の一種らしい）を掛けて貰った。ついでに強化もして貰った。

今私は黒い法衣？みたいなのを着ている。足には草履。手には錫杖と紫の風呂敷に包まれた花瓶。そして胸にはサラシ。・・・どうせ巻くほど無いけどね！

話によるとこの世界では文化として、お坊さんとかもう髪を伸ばせない人（切ないなぁ）以外、みんな長髪らしい。中学生までは短かったが高校に入ってから伸ばしていたので正直助かったと個人的には思っているのだけど、安重さんに云わせるとまだ短いそうだ。私の肩甲骨にやっと届くぐらいの髪は紺色の結紐で適当に結っている。櫛や鏡などの現代式・お化粧道具は鞄の中に入れっぱなしだったので色々助かった。・・・鏡とかね。この世界の鏡は歪んでたし小さいし見にくいったらなかった。

昨日よりも慣れてきたようでさくさくと下山していく。強化をして貰ったお陰で足の指は全く痛くない。【方術】すげぇええ！と感動しつつ都の門を潜った。修学旅行で見た朱雀門みたいなおっきくて真っ赤な門を潜り都の中へ入る。

都の雰囲気は前に修学旅行で行った京都の様な感じだ。碁盤の目みたいに整えられた都の中は本当に平安時代っぽい。別に、こうであるから平安時代だ！なんて明確なものはない。と云うか、寧ろそんなに平安時代の事を知っているわけではない。だけど、此処は時代劇とかで見る江戸時代や戦国時代とはなんとなく沿ぐわないのだ。いや、なんでか解んないけど。

まぁ細かい事は置いといて、さて観光だ。前に来た時は下山に思った以上に時間が掛ったせいで街をゆっくり見る間なんてなかったのだ。

私は取り敢えず一通り街を一周した。この都の中には3本の川が流れている様でそこに朱色のアーチ形の橋が架かっていて、なんだか可愛らしい。大通りの一番向こうには宮廷が見える。・・・デカイし豪華だし赤いしなんか凄いなぁと呆れながら脇道へ。大通りなどは道が綺麗に整備され真っ直ぐ伸びているが、細い路地になると微妙に入り組んでいて、こういう道に入るとワクワクしてしまう私と

しては非常に楽しかった。

狭い小路をキョロキョロと歩いていると簪や巾着の様な小物のお店を発見した。フラフラと簪などが置いてある棚に足が向いた（これでも女の子だからね！）のだが、店番をしているらしき女性がキョトンとした顔で此方を見たのを見て私は慌てて方向を変えた。例え、目にキラキラ輝く宝飾が映った瞬間に条件反射で足が向くくらい乙女だったとしても、自分、今、男の格好、で、す、か、ら！周りからしたら違和感の塊だ！

ちょっと意気消沈しつつ隣にあった団子屋に腰掛け店子さんに声を掛ける。・・・別に、隣の店に入ったから簪や巾着が買えるってわけじゃない。多少の御金は貰ったけれど所詮はお団子一皿とお茶一杯で半分が無くなる程度だ。まぁそんな事はお金を受け取る時こんな信用ならない居候に金持たせていいのかと思いつつ、今のところは二人の好意に甘えないと野垂れ死んでしまう為お礼だけ云って大人しく貰っておいた自分が云う台詞ではないが。

もっちりとして、しつこすぎない甘さにほうぅと溜息を吐く。やっぱり甘い物って良いよなぁ。糖分最高！お茶も美味しいし。美味しい物は良い！

私がよっぽど幸せそうな顔をしていたのだろうか、店子さんは一皿おまけしてくれた。やった。それにしても顔を真っ赤にしていたけれど風邪でも引いてるんだろうか。

このお店で持参した御握りを食べてから私は機能と同じ家に向かった。

「・・・・・・と云う訳で御当主。あちらに見えます惠濃廟謳山の神聖な湧水と山頂近くの土を神の御膳にお供えして我が師が念を込めながら作った花瓶です。本来は、お寺に持っていく手はずだったのですが此方に融通して頂きました。此方を私の云う所に置いて下

されば万全かと」
「ぬぬ・・・確かにお主が帰った後、娘の体調が回復した・・・・・・・」
「では、此方の花瓶は御購入して頂くことになります。お代などは此方に」

実際はお寺の近くにある粘土質の壁から安重さんが趣味で作ったもので、青かったのもたまたまなのだが・・・まぁこれで治るんならあちらも儲けものだろうし、此方も儲けさせて貰うとしよう。と云う訳で安重さんが渡してくれた紙をにこやかに手渡す。
払え。そして私は帰る。

「・・・・・・では今すぐ用意させる。そこで待っておれ」
「お願い致します」

ちょ　ろ　い　ぜ　！

顔に出ないように気をつけつつ頭を下げる。安重さん、流石です。尊敬します。元手0だったのになんか結構貰えるみたいだ。一応お金を払ったりはできるけれど物価とかをまだそこま把握していないのでお金の価値が良く理解できないが・・・まぁお団子代よりかはかなりあるようなのでほくほくだ。
上機嫌でいる私に厳しい顔をした御当主が「して、」と話しかけてきた。

「お主、娘に何をしたのだ？」
「は？・・・あぁ、失礼。何と申されましても、退魔、としかお答えできないのですが」
「戯言を・・・！娘に何か妖術の一種でも掛けたのじゃろう？！」
「・・・御当主、私にそのような能力はございません」

これは本当だ。いや、【能力】はあるのかもしれないがやり方が解らないのだから無いも同然なのだが。

「本当だろうな」
「はい、勿論でございます」

取り敢えず頭を下げた。ていうか可笑しくないか。なんでそう云う展開になった。頭を上げると同時に当主の家来が朱色の巾着を持ってきた。・・・タイミング、良すぎないかな。

「これで良かろう。もう二度と来る出ない。娘が惑わされるからな」
「はぁ・・・ですが、依頼が来ればまた参上いたします。仕事ですので」

良く解んない事になったなぁと溜息を吐きながら門から出た。

そんな私を門の隅から見ている人がいるなんて、思いもよらなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1889j/

妖怪屋【狐亭】

2011年6月14日22時26分発行